

フィリピン系ニューカマー家族の教育戦略

— 母国親族の教育意識と日本における教育戦略 —

A Study of the Education Strategy of a Filipino Family in Japan

角替 弘規

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2013 年 3 月 15 日 受理)

1. 問題関心

本研究の目的は、フィリピン系ニューカマー家族が国際移動の中で子供を養育するに当たっていかなる教育戦略に基づいているのか、特にその家族関係が複雑な中において、母親がどのような資源を駆使して子供を教育しているか、とすることを解明することにある。

フィリピン系ニューカマーの国際結婚家庭を対象に調査を行う中で明らかになったのは、かれらの家族に見られる関係の複雑さである。これまでインタビュー対象となった 5 家族の内、3 家族がフィリピンから子供を呼び寄せており、さらに 1 家族が今後の呼び寄せを検討していた (角替・家上・清水 2011, p.95)。多くの場合、母国に夫以外の男性との子供を残していたり、呼び寄せたりするなどして、来日後に家族関係が複雑化している傾向が見出された。それは単に家族成員の増加等に限らず、例えば母国に残してきた子供がいる場合に行われる養育費の送金を巡り夫婦間に溝が生じることへの指摘 (ノリエド 2002, p.53) からも明らかなどおり、継子の養育における夫婦間での合意形成の必要性や、またそれを契機に夫婦間の権力関係の非

対称性が改めて露呈する等、家族成員間の関係のあり方に様々な影響を及ぼしていることが考えられる。

厚生労働省の統計では、日本の国際結婚件数は 80 年代以降急速に増加している (厚生労働省 2012)。この時期の国際結婚の特徴について施 (2010) は夫日本人—妻アジア人の組合せが大多数であり、そこに国家間の経済格差が背景として存在すると指摘する (p.122)。そしてこのタイプの国際結婚は夫婦双方が対等な地位にないために DV や離婚などの家族リスクを発生させる要素となるとも指摘する (同頁)。

また同統計によれば、再婚件数の増加も同時に指摘されている。この動向に基づいて野沢 (2006) は「ステップファミリー」の増加傾向を推定している (p.26)。そしてステップファミリーが、初婚家族やひとり親家族と比べ、夫婦関係・親子関係・継子関係の三種類の組み合わせからなり、それぞれの関係性の強さが不均衡な状態としてあるとして、その複雑さを指摘する。また小木曾 (2003) は、ステップファミリーにおける子供の養育環境に注目し、親の離婚や再婚による心理的な影響に対する支援の在り方を検討している。ス

テップファミリーにおいても家族を家族として安定させていく努力が家族成員に求められるという点において、一定の不安定さを内在させていると考えることができるだろう。

以上の観点に立ち、今一度フィリピン系家族を見た場合、まずはそれが日本人夫とフィリピン人女性との国際結婚であり、そして多くの場合、フィリピン人女性の側に連れ子が存在し、ステップファミリーとしての複雑さをも併せ持っている。かれらの家族が不安定性と複雑さを併せ持った家族として浮かび上がる。

さらに、フィリピン人女性の国際移動によりこうした婚姻が成り立っているということも加味する必要がある。小ヶ谷(2004)は80年代以降の「移民/移動の女性化」という世界的な動向の中で、アジア地域の女性の移動の在り方について、欧州におけるそれとは様相が異なり、特にフィリピン人女性の日本への移動過程の状況がフィリピン人女性にとって「不利な状況を重ね合わせた位置」であるとする(p.32)。つまり、フィリピン人ニューカマー家族が、国際結婚であり、ステップファミリーであり、そしてフィリピン人女性であるという点で、不安定さと複雑さがさらに重層化していると見ることができる。

こうした不安定さが重層化している中で、フィリピン系ニューカマーは子供の教育にいかなる戦略をもって取り組もうとしているのであろうか。例えば志水・清水(2001)はニューカマー家族の教育戦略を検討するに当りそれが「可変的なもの、継続的に変化するもの」として捉える必要があり、教育戦略がその時々家族が置かれた状況によってダイナミックに変化しうること、そしてそれを踏まえたいうえでの検討が求められるとする(p.255)。これらをフィリピン系ニューカマーの家族に引き付けて考えた場合、その家族が今日に至るまでどのような変化を遂げてきたのかを明らかにしつつ、そこにどのような困難が出現し、それらをいかに克服してきたのかを記述し理解することが必要となってくる。

そこで、本報告では複雑な家族構成を持つひとりのフィリピン人女性に着目し、父親の異なる子供の教育をどのような家族および親族の状況の下で教育戦略を立て、どのような資源を駆使して行ってきたのかについて検討する。そして、何も資源を持たない一人の女性が父親の異なる子供達を長年にわたり教育していくに当たって、どのような困難があったのかについて考察する。

2. 調査対象者について

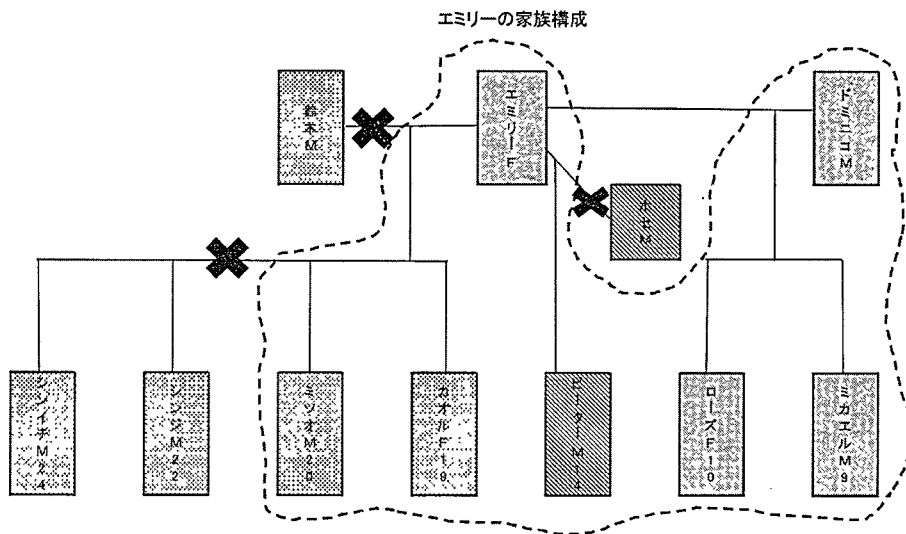
本稿で用いるデータは一連のフィールドワークおよび現地調査によって収集されたものであり、主に1) 2011年11月に実施した現地調査によるフィールドノーツ及び家族・親族に対する非構造化インタビュー、2) 2011年11月に実施した現地調査によるフィールドノーツと家族・親族に対する非構造化インタビュー、3) 2012年7月以降に実施したエミリーに対する非構造化インタビューによって得られたデータを用いた。なお、本稿における個人の氏名と学校名は全て仮名である。

本稿で取り上げる鈴木エミリーは、フィリピンの首都マニラから車で数時間離れたオロンガポ市に生まれ育った。警察官の父のもと、さほど裕福でない家庭に育ち、高校卒業後家計を助けるため様々な仕事を経験した。日本への出稼ぎの機会が訪れたのは、エミリーが19歳の頃であった。エンターテイナーとしての来日であった。

エミリーは7人の子供を出産している。最初の4人は来日後間もなく知り合った日本人男性(鈴木)との間の子供である。後述するが、長男・次男との離別後三男と長女を主にフィリピンにおいて養育した。そしてあるフィリピン人男性(ホセ)との間に男子を1人出産。さらにその後現在の夫であるフィリピン人男性(ドミニコ)との間に2人の子供(女子と男子)を出産した。末子は現在小学校3年生であり、現在も子育ての最中にある。

エミリーの子供と教育歴

名前	M/F	年齢	国籍	状況	父	教育
シンイチ	M	24	J	別居	鈴木	日本 (義母)
シンジ	M	22	J	別居	鈴木	日本 (義母)
ミツオ	M	20	J	同居	鈴木	フィリピン 私立幼→私立小→私立中 日本 公立中→公立高
カオル	F	19	J	別居	鈴木	フィリピン 私立幼→私立小→私立中 日本 公立中→公立高
ピーター	M	14	P	同居	ホセ	フィリピン 公立幼→公立小→私立小→不就学 日本 公立小
ローズ	F	10	P	同居	ドミニコ	フィリピン 私立幼 日本 公立小
ミカエル	M	9	P	同居	ドミニコ	日本 公立小



*点線内が同居している家族を示すが、カオルは調査時点において婚姻のため別居している。
**×印は離婚もしくは離別を示す。
***子どもの名前下の数字は調査時点の年齢を示す。

エミリーの家族は上記の構成図のとおり、その夫婦関係、親子関係、継子関係が複雑に入り組みながらも、一つの家族としてのまとまりは維持している。特にここで注目したいのはエミリーが20年以上にわたる子育てを日本とフィリピンの両国を跨ぐ形で行っており、またそれらが現在も進行中ということである。エミリーの子育ては終始一貫した教育戦略によって貫かれているというのではなく、それがエミリー自身の本意であるかないかを問

わず、エミリーを取り巻く家族のあり方によって複雑に変化しているように思われる。特に本稿では、ピーターの養育と、ミツオ・カオルの養育に着目したい。それぞれの子どもの養育に当っては日比間の移動や子供をフィリピンに残しての出稼ぎ等、エミリーの移動と同時に家族構成も大きく変化しているからである。そして、これらすべての期間において子育てが順風満帆に行われてきているわけではないところにも注目したい。特にピーター

の養育とミツオ・カオルの養育を比較した時、ピーターの養育の不安定さが注目される。

3. ピーターの養育

ピーターはエミリーが現夫のドミニコと知り合う以前にフィリピン滞在中に知り合ったホセ（フィリピン人）との間に生まれた子である。エミリーとホセは婚姻関係を持たないまま離別した。現在ホセとの関係は全くない。ピーターはエミリーの家族の中で、正式な婚姻関係のもとに生まれた子供ではない。その意味において、年上のきょうだいであるミツオやカオル、そして年下のきょうだいであるローズやミカエルとは位置づけが異なる。このピーターの養育の過程を検討すると、その立場の不安定性が垣間見える。

3.1 公立校主体の養育

エミリーはピーターが1歳半の頃にフィリピン人男性であり現夫でもあるドミニコと知り合った。この頃エミリーは一時的にフィリピンでの生活を検討し、日本で稼いだ資金を元手として野菜を卸売りする商売を始めたが程なく失敗。その後フィリピンで生活することに限界を感じ、再び日本での生活を志向するようになる。ピーター誕生後、エミリーは複数回日本に渡り、その間ピーターはエミリーの家族に預けられた。2003年6月には自宅近くの公立幼稚園に入園する。さらに小学校についても自宅近くの公立校に入学させている。このことについてエミリーは

もっといい学校に入れたいと思っていたが、お金もなく、日本に戻るつもりがなかったから、仕方がなかった。お金があればいい学校に通わせたいと思っていた（2011/7/14 インタビュー）

と述べている。

ピーターが通っていたグリーン小学校は、1～3年生までの授業料が年間460ペソ（2011/11

時点）と、私立校の学費より低額である。ピーターが小学校に通い始めた当時、エミリーの家計は非常に困窮し、貯金を取り崩す生活を送っていた。そうした中で教育費の安い公立校に通わせることは当然とも言える。このようにエミリーが公立学校を選択したのは、主に経済的な理由による「仕方のない」ものである。

しかし同時期に、年長のミツオとカオルは私立学校に通学し続けていた。私立学校の学費は非常に高額なため、3人の子供までは通わせることができないという理由も成り立つが、逆に経済的に困難なのであれば、年長のきょうだいを公立校に転校させることもできたはずである。にもかかわらず、年長のきょうだいは私立校へ通わせ続け、ピーターは公立校のままであったということは、単に経済的な理由以外の他の理由の存在を推測させる。

3.2 家族の一時的離別と義母による養育

日本への「移住」を具体的に検討し始めたエミリーは、2003年2月頃から約1年間来日し、住居や仕事の目途をつけ2004年3月にフィリピンに帰国。そして約2年後の2005年12月にミツオとカオル、夫のドミニコの4人で来日した。ミツオとカオルは日本で公立中学校に入学し、ドミニコは製造業の職を得た。

エミリーは残してきた子供達をドミニコの母親に預けた。それは当時エミリーの母親が体調を崩し、経済的にも困窮していたため、夫の母を頼ったと説明している（2012年9月8日インタビュー）。ピーターはドミニコの母とは折り合いが悪く、時には体罰を受けたという。しかしピーターは義母の家での生活の経験をエミリーに伝えることはなかった。同じく義母に預けられた妹ローズと弟ミカエルが義母にとっては「内孫」であるのに対して、ピーターは「継子」であり、年少のきょうだいたちとは異なる扱いを受けていたように見受けられる。すなわち、フィリピンの親族内にあっても「継子」としてのピーターはその家族関係の中で不安定な位置づけを余儀なく

されていたということになる。それは義母の家での生活を送る中のピーターの修学経験にも見出すことができる。

エミリーたちが渡日してしばらくの間、ピーターはそれまでと同様公立のグリーン小学校に通っていたが、学年が変わるのを契機に、ミツオとカオルが通っていたサンタ・マリア小学校へ転校する。また、妹分のローズもサンタ・マリア幼稚園に入園している。これはエミリーたちが日本での生活を始めたことで、私立校に通わせるだけの学費を負担可能になったことによるが、転校を促したのは、日本で生活するミツオであった(2012/9/8インタビュー)。エミリーによれば、ミツオはピーターが公立校に通学することに不満であった。エミリーはミツオの意見によりピーターを私立学校に転校させた。この転校がエミリーではなくミツオによるものであることに留意したい。これまでピーターを公立小に通学させていたのは、経済的な困窮という「仕方のない」理由からであった。こうした中でミツオがピーターの進路に注文を付けていることは、ピーターの教育を決定する主体が、エミリー以外の親族にもあることを示している。

しかし、ピーターのサンタ・マリア小学校への在学は僅か1学年で終了してしまう。翌年3月に学年が終了すると、次の年度からはピーターは学校に通っていない。同じくローズも翌年度からは幼稚園には通っておらず、義母のもとで生活を送っている。エミリーは、当時呼び寄せのための日本のビザが降りるのを待っており、ビザが降りたらすぐに日本に呼べるように「待機」していたとする。そうすることが学費の節約につながるため、あらかじめ学校に通わせていなかったと説明する(2012/7/14インタビュー)。

結局、学齢期にあるピーターは暫くの間、義母の家で生活せざるを得なかった。そして義母との折り合いの悪さが原因となり、同市内のエミリーの弟の自宅に預けられることとなった。しかしここでも学校に通わなかった。2008年1月に妹ローズ、弟ミカエルとともに

日本に呼び寄せられるまでの約9か月間、ピーターは不就学の状態に置かれた。その間、ピーターは学校での学習に代わる働きかけを弟家族の誰からも受けなかった。

ピーターは公立校から私立校への転校、そして、僅か1年間で退学し、9か月間の不就学という、極めて不安定な状況の中におかれてしまった。私立学校への転校が後述する「良い教育」を与えるためのものであったとしても、短期間で教育環境が大きく変化することが、ピーターにどのような影響を与えたのか、非常に心配される。その一方、エミリーは毎月義母と弟に相当額の養育費の仕送りを行っていた。それはフィリピンに残してきた子供達にエミリーが望む教育を与えてもらうためでもあった。しかし養育費として要求される額が非常に高額であることも災いし、結果的に子供達を日本に呼び寄せるのが遅くなってしまった(2012/9/8インタビュー)。ここには日比間での子供の養育にかかわる大きなジレンマを見て取ることができる。

ここに見出される複雑さあるいは不安定さは、一つにはピーターを育てていく過程において誰がその教育を担っているのか、大人の側の責任主体が今一つはっきりと見えてこないところに起因する。ある局面ではエミリーがピーターの通う学校を決定し、ある局面ではミツオの意見によって転校が果たされている。エミリーは義母や弟に養育のための送金をしながら、結局は子育てについての意図や方針が明確に伝わっていなかった。そして日本への呼び寄せという計画の中で経済的な節約のためにピーターは修学の機会を奪われた。

ピーターにとってフィリピンにおける親族の教育意識は、非常に高い進学意識等に強く左右されるということではなく、ピーターが継子であるということが、むしろ消極的な教育への働きかけにつながっているように思われる。不安定な環境の中に置かれるピーターに対し、できれば良い教育を与えた方が良いと具体的な働きかけを行ったのは兄のミツオであり、それはフィリピンの親族の教育意識

に対する対抗として受け取ることができる。

4. ミツオとカオルの養育 – 不本意な離別と私立校へのこだわり

次にピーターよりも年長のきょうだいであるミツオとカオルの教育について検討しておきたい。ミツオとカオルの教育はピーターとは異なる複雑さを示している。

ミツオとカオルはエミリーが80年代後半に来日後結婚した日本人男性との間に生まれた4人の子供の3番目と4番目の子供である。いずれの子供も日本国籍であるが、事情により4人のきょうだいは日本とフィリピンで離れ離れとなり、ミツオとカオルについてはエミリーとその親族がフィリピンで養育した。以下、かれらが育てられた過程を検討する。

4.1 きょうだいの離別

エミリーは87年にエンターテイナーとして来日し関東地方で就業し、間もなく客であった鈴木（日本人）と知り合い、結婚に至る。結婚後エミリーは、専業主婦として日本に滞在し、鈴木との間にシンイチ・シンジ・ミツオ・カオルの4人の子供を出産した。会社の経営者であった夫は仕事が忙しくエミリーが育児を一手に引き受けた。異国での子育てには苦勞が多く、この間エミリーは自分の母親をフィリピンから呼び寄せている。

エミリーの家族に転機が訪れたのは、三男のミツオが2歳の誕生日を迎える頃であった。夫は仕事が忙しく自宅に帰宅することがほとんどない状態だった。夫は過密な仕事が続く中である刑事事件を起こし警察に検挙されてしまった。

検挙によって生じた一連の事態が落ち着いたのち、エミリーと夫はその後の身の振り方を相談するために夫の実家に戻っている。そこでエミリーは夫の母親からミツオとカオルを連れてフィリピンへの帰国を促された。エミリーは夫が大変な時期にフィリピンに帰るべきではないと考えていたが、義理の母から

強硬に帰国を迫られ帰国せざるを得なかった。結果的に長男と次男は夫の実家に引き取られ、その後エミリーがその子供達に会うことは叶わなかった。エミリーは不本意な形で長男、次男と離別せざるを得なかったのである。やがて、夫との結婚生活も実質的に送ることができなくなり、夫の母親との関係も決定的に断絶してしまった。エミリーはフィリピンで夫からの経済的援助を得られないままミツオとカオルを育てざるを得なくなった。

4.2 フィリピンにおける養育 – 私立学校へのこだわり

日本人夫と離別し、単身になったエミリーにとって、ミツオとカオルを日本で育てることは非常に困難であった。このため子供達をフィリピンの実家に預け、エミリー自身は日本で働きながら養育することとなった。当分の間、子供達の養育はエミリーの母親と長姉が養育することとなり、2人がフィリピンの幼稚園に入園したのは1年後のことであった。当時エミリーが選んだのは私立のサンタ・マリア幼稚園であった。当時サンタ・マリア幼稚園に子供を通わせている家庭は「お金持ち」ばかりであり、保護者からの評判も高かったという。

一方でサンタ・マリアは学費が高く、修学旅行のような行事においても費用が掛かるといふ情報も得ていたが、エミリー自身が日本で出稼ぎをしていたことから、2人の子供を私立の学校に通わせるだけの経済的な余裕があった。エミリーは幼稚園段階の終了後、接続して設置されているサンタ・マリア小学校への入学を選択している。幼稚園に引き続き小学校も同じ学校を選択した理由としてエミリーは次のように話している。

昔（自分が子供の頃）はお金もなくて、いい学校に行かせてもらえなかった。子供を何とかしたい。もう少し高いレベルの教育を与えたい。自分ができなかったことを子供には与えてあげたい（2012/7/14 イン

タビュー)。

しかしながら、ミツオとカオルはサンタ・マリア小学校で2年間学んだ後、同じく私立学校であるアカデミア小学校に転校する。その理由としてエミリーは2点を挙げる。

一つには、サンタ・マリア小学校では、子供達の誕生日に各家庭で誕生パーティーを開催し、クラスメイトを呼び合うという「習慣」があったことである。エミリーにとってこの「習慣」は非常に面倒なことであり、子供達もこの雰囲気になじめなかったという。さらにエミリーの不在について揶揄する言葉が子供達に投げかけられていたという。

もう一つは進学先の確保である。サンタ・マリア小学校には上級校が併設されておらず、上級校に進学するためには別の学校に進学する必要があった。その点、アカデミア小学校であれば上級校が併設され、そこに進学できる期待が持てたためである。

エミリーの「良い教育を与えたい」という言葉の意味するところは、単に私立校であればどこでも構わないということに止まらない。それはかつて自分が受けたよりも質の高い教育を与えたいという意識の表れと捉えることができる。そうした教育は公立校に通学していたのでは不可能で、私立校への通学によって叶えられるという意識である。

やがてピーターが誕生した後、ミツオは小学校から中学校へと進学するのに合わせて、これまで学んでいたアカデミア小学校から私立のインペリアル中学校に進学した。学費はアカデミア小学校よりも高額になったという。インペリアル校はアカデミア校よりも歴史のあるカトリック系の学校である。エミリーは「生活がとても苦しかったが、何とか入学させた」と語っている(2012/7/14 インタビュー)。

先述のとおり、ミツオとカオルの二人を私立に通わせることができて、ピーターまでは通わせることはできなかった。ピーターは幼稚園も小学校も自宅近くの公立小学校(ブラウン小学校)に通うこととなった。ミツオ

は現在もピーターを私立学校に学ばせなかったことについてエミリーを責めるという。エミリーはこのことを認めており、「ピーター君には申し訳なかった」と語っている。

そこまで経済的に困窮していてもミツオとカオルを私立学校に通わせたのは、「良い教育を与えたい」というエミリー自身の意識に加えて、私立学校への通学を子供達が強く希望していたからであると、エミリーは語っている。

「(ミツオは、)公立に行くくらいなら学校に行かないって。あと、自分が日本人だからって思っていることもあるみたい。」(2012/9/8 インタビュー)

ミツオは、当時エミリーが家の経済状況が困窮しているので学費の安い公立校への転校を打診したのに対して、「(日本に残っている)兄弟たちはお金をいっぱい使っているのに、なぜぼくたちにはお金がないのか」と反論し、エミリーには返す言葉が見つからなかったという。そして

「とにかくミツオとカオルに寂しい思いをさせたくなかった。公立校に入れたら寂しい思いをさせてしまうのであればそれはさせたくなかった。ミツオとカオルは真面目だったから。」(2012/9/8 インタビュー)

つまり、同じ日本人の父親のもとに生まれたにもかかわらず、私立校にすら学べないという「寂しい思い」をさせないことが、エミリーがミツオとカオルを私立校に通わせ続けた大きな要因と思われる。日本に残してきた2人の子供は、裕福な夫の実家において育てられ、フィリピンの生活よりも恵まれた環境で学んでいる。それ故に、自ら育てる2人の子供には何としても「良い教育」が必要であると考えたと思われる。

ミツオとカオルがインペリアル校へ転校した当時、エミリーはすでに現在の夫であるド

ミニコと結婚していたが、その際にドミニコは積極的に賛成しなかったという。むしろ躊躇を示すドミニコを押し切って転校を決断したことから見ても、ミツオとカオルの教育については並々ならぬ意識をもって臨んでいるように思われる。

ミツオとカオルが育てられてきた経緯を見れば、そこにはエミリーの私立校に対する一貫した拘りを見出させる。それは、自分が受けられなかった「良い教育」を子供に与えたいという意識から生じるものであり、また、期せずして日本に残さざるを得なかった長男・次男との比較において、ミツオとカオルに引け目を感じさせたくないという意図もあるのではないと思われる。同時にこの観点は、ミツオ自身にも認められた。

ただ、こうした私立校への拘り、「良い教育」への拘りが結果的にはミツオとカオルに複数回の転校を余儀なくさせていることも事実である。こうした生活環境と教育環境の変化がミツオとカオルの意識にどのような影響を与えているかについて今後検討の余地がある。

ミツオとカオルの教育を巡り、母親としてのエミリーの教育意識が極めて強く発揮されている一方、母国親族はあまり強い影響を与えているようには見受けられなかった。エミリー自身も入学させる学校についての情報や意見を周囲に求めつつも、最終的に決定するのはエミリー自身であった。この点において、ピーターの場合とは大きく異なっている。

5. 考察

エミリーの子供に対する教育の在り方を検討すると、その在り方に大きな影響を与えているのは「経済的資源」と「親族」であるように思われる。

ミツオとカオルを育てるに当り、エミリーは自ら日本で働くことで得た経済的資源をフィリピンの家族に仕送りすることで、「日本人」であるミツオやカオルを私立校に通学させることができ、それにより日本で生活を送

る離別した兄に引けを取らない「良い教育」を与えようとした。さらに、エミリーが自ら稼いだ経済的資源を駆使することで獲得したのは、子供の教育についての決定権であった。子供達をどの学校に通わせたいかということについての決定権は、最終的にエミリー自身に委ねられていた。

一方で、ピーターに対してはミツオやカオルと異なり、エミリーは十分な経済的資源を投下できなかった。ピーターには、できる限り安価に教育を受けさせているように見受けられ、同じ子供でありながらも同様の教育を与えられないところに、エミリー家族の困難さを見出すことができる。同じ家族の子供でありながら、教育に対する経済的資源の投入に差が生じるのは、それぞれの子供の生い立ちが関係しているのではないかと考えられる。

これと関連して、子供達の教育を左右するもう一つの資源は「親族」である。すなわち母国における子供達の実際の教育の担い手としての親族の存在である。エミリーの場合、ミツオとカオルの2人については自らの母親と姉に、ピーターについては義母にその養育を依頼していた。ミツオとカオルには、経済的な困窮はあったにせよ、エミリーの考えたとおりの養育を与えることができた。しかしピーターについては、ミツオとカオルとは異なり、特にエミリーが家族を日本に呼び寄せた後は状況は悪く、来日前の9か月間は不就学状態に置かれ、さらに彼の学習を積極的に支援する親族は存在しなかった。

このようなピーターとミツオ・カオルの教育の違いは何に起因するのであろうか。そこにはその子供がどのような来歴をもってその家族に参入しているのかが大きく影響しているように考えられる。エミリーは、経済的な困難さにもかかわらず実子を私立学校に通わせ続けつつ、継子は不就学状態に陥らせてしまった。このようなことが生じた原因は、エミリーとそれぞれの子供の間の親子関係だけで理解されるのではなく、エミリーと義母の関係、ピーターと義母の関係、エミリーと夫

の関係、夫と義母の関係、他の子供とピーターの関係など、様々な家族成員間の中で織り成された一つの帰結として捉える必要があるように思われる。ピーターについてはそれが不就学という大きな不利益を被りうる立場に置かれてしまったこと自体が、エミリーの家族の困難さをそのまま示していると思われることができるだろう。

一つの家族とは言え、その家族がステップファミリーである場合、子供の来歴によって親子関係、継親子関係、きょうだい関係とそれぞれの関係性がそれぞれに異なるあり方で存在しており、子供に対する教育のあり方も非常に複雑な様相を呈することとなる。今回取り上げたエミリーの事例はそうした複雑さを如実に示したものと言える。またピーターが置かれた環境の事例からは、複雑な家族または親族関係の中で子育てが行われる際に、単純に親族関係のもとで子弟に対する良好な教育環境が自動的に準備されるわけではないということを示している。つまり、同じ親族として一つの括りの中にあっただとしても、その子供がいかなる経緯をもってその親族関係の中に位置づくのかという点において、そしてまた日本において生活する家族への期待のあり方によって、母国における教育の与え方も大きく左右されると言える。

フィリピン系家族とその子供の教育のあり方を検討しようとする際には、その家族がどのような構成となっているのか、それぞれの子供がどのような関係のもとにおかれているのかといったことに留意したうえで、これまで誰がどのような教育を行ってきたのかといったことについて丁寧にとどめていく必要がある。

【参考文献】

厚生労働省, 2012, 「平成 24 年我が国の人口動態」, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>

- ノリエド., J・N 奥田安弘, 高畑幸訳『フィリピン家族法【第2版】』明石書店
- 野沢慎司, 2006, 「ステップファミリーをめぐる社会状況」野沢慎司・茨木尚子・早野俊明・SAJ 編著『Q&A ステップファミリーの基礎知識 子連れ再婚家族と支援者のために』, 明石書店, pp18-38.
- 小ヶ谷千穂, 2004, 「滞日フィリピン人女性の社会活動の多層性」, 伊藤るり『現代日本社会における国際移動とジェンダー関係の再編に関する研究』, お茶の水女子大ジェンダー研究センター, pp.29-52.
- 小木曾宏, 2003, 「家族援助の方法と実践 (4) ステップファミリー研究—「離婚」「再婚」ケースの支援と施設職員の役割—」, 『千葉明德短期大学紀要』第 24 号, 千葉明德短期大学, pp39-50.
- 施 利平, 2011, 「国際結婚」, 井上真理子『家族社会学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.114-131
- 志水宏吉・清水睦美, 2001, 「ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって」, 明石書店.
- 角替弘規・家上幸子・清水睦美, 2011, 「フィリピン系ニューカマーの教育意識に関する一考察 —大和市の国際結婚家庭の事例を中心に—」, 『桐蔭論叢』桐蔭横浜大学, pp.89-97.

※本研究は H22-24 科学研究費補助金基盤研究(B)「国際結婚家庭に育つフィリピン系・タイケイニューカマーの学校適応に関する実証研究」(課題番号 22330238 研究代表者:角替弘規)の研究成果の一部である。